

# 青葉会ホームページより



みなさんといっしょに作るホームページに。。

## 物理担当

松原(赤星) 智子

同窓会のホームページが出来て二年がたちました。訪れた方は、延べ三千人を超えています。

この四月に、私は定年を迎えましたが、同じ都立高島高校で再任用になり今までと同じく情報の授業と広報情報部という分掌の仕事を行っています。なかなか、時間がないのですが、しばらくはホームページの仕事が続けようと思っています。四十九年卒業の小林勇起雄さんからうれしいメールが届きました。同期会のご報告で、添付された写真とともに九月五日にホームページに掲載されました。川上先生(地理担当)のお写真もありますので是非アクセスをしてください。

ホームページを訪れた方は、近況や学校時代のこと、一言でもお書き下されば幸

いです。また、写真やお便りは、郵送でもホームページに掲載します。以下の私の住所にお送り下さい。

同窓生みなでいっしょにホームページを作りましょう。(〒七五〇〇八二板橋区高島平 三一〇一四一四〇三)



[http://www.geocities.co.jp/mita\\_aobakai/](http://www.geocities.co.jp/mita_aobakai/)

## 三田高は風化せず

昭和43年卒

中山 市太郎

伝統ある三田高校定時制の灯が消える、とかつての同級生から聞きました。昭和四十三年組の中山です。

三月八日は、海外に行っていて残念ながら出席できませんが、寂しさと、母校への感謝の気持ちから、また

再出発した自分自身への区切りとして、このメールを投稿いたします。

東京タワーのライトを横目に、三田警察署から高校へのゆるやかな坂を、仕事帰りに通った黒ボタンの詰標とセーラー服。それは遠く故郷を後に上京してきた青年の、自立と、東京で将来を掴もうとするけげな姿にだぶります。

就職列車で到着したのほつぺを真っ赤にした少年と少女が、つまずき、転びながら、ひたすら前へ前へとがむしやりに生きていた時代。貧しいが、不思議と元気な、青春そのものでした。月明かりに照らされた小さな校庭も、汗を流した木造の体育館も、詩を語ったおセンチ山も…。みんな過ぎし日のこととするには、

今なお鮮烈にあの日々の映像が蘇ります。いつの間に覚えたのか、「差別」や「人権」について真剣に議論してくる生徒もいれば、逆に、「昨夜はやばかった」と、い

つぱしの兄貴分ぶって肩をいからせる大将もいました。給食時間にタバコをくゆらせる豪傑もいれば、学校帰りに先生と連れだつて 赤ち

ようちんの暖簾をくぐった夜もあつたような気がしません。映画「三丁目の夕日」に描かれた世界は、そのま

ま高度経済成長を支えた、私たちの思春期に重なりま

す。あれから半世紀。三田の夜の学び舎から巣立っていった私たち団塊の世代は、その後、昭和元祿、オイル

ショック、バブル景気、長期不況、と時代の波に 翻ろうされながら二〇〇八年を迎えています。鏡の前の自

分の姿は、眼じわも白髪も増え、身体もかつての体力を失い、年齢相応になつてきた感じですが。私はいま東京郊外の大学

で、かつての自分たちと同じほどの若者相手に、教壇に立ちジャーナリズムの講義をしています。

きちんと自分の子供世代を育ててこなかったのではないかと感じる人が多いからです。パソコンでも、

携帯でも、カード一枚で何でも買ってしまう。無尽蔵に「怪しげな大人の情報」

をやりとりするインターネットが当たり前の生活環境。将来のジャーナリストを

志す若ものに、生きていくためには「我慢」しなければならぬことや「譲ること」が必要の場合もあること、人を「思いやる」こと、

他人の「痛みを知る」ことなど、どういう言葉で語ればいいのか途方に暮れることがあります。「三丁目の夕日」を見せて若者が一生懸命に生きていたあの時代の

こと、豊かさの陰には公害や、格差というたくさんの代償を伴ってきてること、かつての集団就職組が最近

はアジアや中南米からの出稼ぎ組に変わってきてることなど、時代の動きには必ず「光と影」の両方があることを、知ってほしいと呼びかけますが…。

が同時に進行しているようです。

一昨年まで勤めていた放送局で、都庁番組を担当していたときに、教育部門の

長から教育改革の熱弁を聞かされたが、釈然としないものを感じました。「新価値」とか「経済効率」「リベンジ」という言葉が流行り、古い

ものは「無駄」として、一掃してしまおうという空気が庁内を包んでいたのを覚えて

います。三田高校は、私の中では、今も歴然と輝いています。古く、風化してしまつては

いません。あの頃の自分に帰りたいとは思いませんが、あの貧しさや心の豊かさがばねになって、いまの自分を作り上げてくれたと信じているのです。風化しない体験。いや、風化させない体験を、いまの若者に伝えたい、と私は今日もまた教壇に立ちます。三田高定時制の卒業生であったことを誇りに。

